

「宗教のいま」を考える

毎日新聞客員編集委員 横山 眞佳

第19回

戦争と干ばつにあえぐアフガニスタン。加えて今回の米軍などによる報復攻撃で、人々はいよいよ絶望的な状況にある。WCRP（世界宗教者平和会議）日本委員会は、いち早く難民救済のため国連関係機関に1千万円を贈ったが、立正佼成会でも支援のための具体的な行動計画案作りに入っている。一体、どう手助けできるのか。アフガニスタンとパキスタン両国で17年間にわたり診療活動を続けている医師、中村哲さんに聞いた。

ことながら、一般的な状況では、異常干ばつに關しWH O（世界保健機関）とWFP（世界食糧計画）は、昨年の2000年5月から異例の警告を発し続けている。干ばつはアフガニスタンだけではなく、中央アジアのイラン、パキスタン、北インド、そして中国西部、北朝鮮までユーラシア大陸の広域にわたり被害が出た。とりわけ激烈だったのがアフガニスタンで、1200万人が被災し、うち400万人が飢え、100万人が餓死線上にあると、悲痛な報告内容だった。しかし国際社会はまともに対応しなかったという現実がある。誇大発表ではないかとも言われたが、決して誇張ではなかった。——どんな被害状況だったのですか。

中村 恐ろしいことが始まっているのではないかと思われます。地球温暖化と関係があると言われている。ヒマラヤからヒンズークシ山脈にかけて雪が消えつつある。これ

ら高山の雪が、いわば貯水の水瓶になっていて、夏に雪が溶け、あの乾燥地帯をつるおすという関係になっていたのが、これで水の蓄えがなくなると、飲料水もなくなりました。中村 これには国連内部でも相当意見の相違があったと言われ、今年1月に発動にな

——悲惨なところになっているのですね。その上に、今度は報復爆撃にさらされた。しかしその前に、国連の制裁がありましたね。

中村 そう。国連の経済制裁が発動された。なんと食糧まで止めようとしたのです。——その制裁は干ばつで人々の飢餓が広がった、その前

なから干ばつ被害の後です。100万人が死んだというのは決して誇張した数字ではなかった。しかし制裁が発動された。



なかむらてつ 1946年、福岡県生まれ。九州大医学部卒。84年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールでハンセン病と貧困層の一般診療を開始。以来、今日まで、アフガニスタンの難民、無医地区での診療実践にも活動範囲を広げ、さらに干ばつ後は飲料水確保のためアフガン人労働者とともに井戸掘り計画を実践中。著書は『ペシャワールに』『医者井戸を掘る』など。

中村 哲さんに聞く(上)

アフガニスタンの苦難

難民をどう手助けするか



12月に決議され、今年1月に発動しました。棄権したのは中国とマレーシアだけで、日本も安保理の決議に従った。最初は食糧の移入まで止めようとした。しかし、あまりに認識不足ではないかとの声が出た。

——最終的には、食糧ははずされた？

中村 食べ物だけはね。WFPや国連の現地職員らが「そんなことをしたら、大変なことになる」と、必死の訴えをして思いとどまらせた。だからアフガニスタンに対しては、アメリカは今回の爆撃からでなく、テロ国家だとして、いつかつぶしてやろうという意識があったのではないですか。

——アフガニスタンの人々には、なんともひどい話ですね。干ばつに加え、今回の米軍による広範囲の空爆です。自然も人々の暮らしも変わっ

たでしょうが、かつての平穩な時代のアフガンの姿はどうだったのか。

中村 豊かな、それなりに安定した農業国家だった。畜産品や農産物は、主にパキスタンに輸出し、それで生計を立てている側面があった。交通の要衝であるため、シルクロード時代からの伝統で運輸、通商などの商業活動も盛んだった。

——いわゆる交易ですね。

中村 そうですね。周辺国の商人と結んでマージンが入っていた。現金収入はこの程度で、貨幣経済が浸透してはいないような地域もたくさんあった。だから経済のグローバルゼーションは、なじまない。耕地を耕しての、自給自足がベースの国だった。

——テレビの画像で見ると、乾燥した景色が広がって

中村 いまは水が枯れてきていて川の水位が下がり、普通夏の間、とうとうと流れて渡れないのが、歩いて渡れる。水田は干上がってびび割れ、緑の眺めが極端に少なくなっている。これがある意味では、戦争よりも大問題ですね。アフガニスタンの復興援助を考えると、難民救済が緊急課題ですが、併せて荒廃した国土が回復され生活基盤が整えられないと人々は故郷に戻っても暮らせない。緊急の援助とともに、息の長い支援が求められている。

(次回に続く)

緊急援助と共に息の長い支援を——この国の圧力です

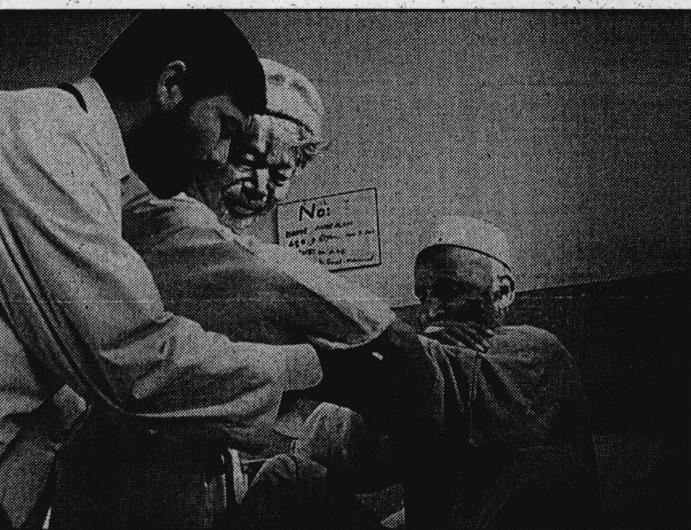
中村 アメリカですね。イエメン沖で米駆逐艦が自爆テロ攻撃を受けた。これに対する報復制裁が決められた。

——ビンラディン・グループの犯行とされているが、これも確証はない？

中村 確証はないといわれています。

——でも、これを理由に制裁のリーダーシップをとった？

中村 国連の対アフガン制裁は米国の提案で2000年



ペシャワールの病院で患者を診ながら、地元医師を指導する中村医師（11月下旬、山本宗補氏撮影）

た。だから干ばつ被害の後です。100万人が死んだというのは決して誇張した数字ではなかった。しかし制裁が発動された。